

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。《本文には、問題作成上、改変した部分や省略した部分があります。》

ラスベガスにやってくる前にニューヨークの広告代理店やテレビ局のいくつかを取材のために回り歩いてきたのですが、そこで出あったプロデューサー、あるいはデザイナー、広告マンたちは、なんともすさまじいほどの激烈な生存競争の生活をつづけていたのです。

朝は五時六時に起き、そして昼はビジネスランチで会議をやり、午後中働いて、八時から次の打ち合わせに行く。さらに山ほどの書類を抱えて自分の部屋へもどると、徹夜でその仕事と取り組む。そして二、三時間の睡眠のあと、また朝の電車に乗る。そのような日常を戦いのようくり返している彼らを眺めると、エリート的アメリカ人たちが抱えているストレスの大きさ、そしてプレッシャーの強さをいやというほど感じさせられたものでした。

つまり、あの生存競争の厳しい自由主義社会で、もしも人より抜きん出た生活を維持しようとするれば、それこそ働いている間中は、燃え尽きるような勢いで走りつづければなりません。ステイタスがあがっていくにつれて、むしろそうなのです。しかも自宅へ帰ってくればまた同居人たちとの間に、それが妻であれ、子供であれ、ともに人間対人間の自我を主張しあうなかで、**○心○意**、サービスが要求されます。そんなふうにして生きている人びとが、心の中に発散しえない巨大な爆発物を抱えていることは容易に想像できます。アルコールなどに一時的にでも逃避しなければ緊張の糸がぶつんと切れてしまいそうなほど、彼らは**脇目もふらず**に働いているのです。

ニューヨークの広告代理店が集まっているイツカクでは、以前から、広告マンの現役引退は三十五歳という言葉がささやかれています。もう四十歳をすぎたらすでに現場で働くことはできなくなる。それほどものすごい勢いで才能とエネルギーを消耗していく。それが本場の意味での自由主義経済機構といえるでしょう。

その競争の中で人びとは定期的にバカンスをとります。バカンスをとらなければ生きていけないのです。それも、まとめて一カ月とか二カ月とか、大きな休みをとります。バカンスの間に、これまで鬱積したストレスや、欲求不満や、ありとあらゆるすべてのものを発散して、エネルギーを回復し、ふたたび戦場へもどっていくのです。**A**、彼らのバカンスは、生きていく上で不可欠な、エネルギーを回復する切実な作業でもあるのです。ラスベガスへやってくる人びと、そしてジョーを眺めて死ぬほど笑いこぼしている人びと、そのアメリカ人たちの精神のバランスをとるのだと言わんばかりの必死の笑いかたに、ほくほくといえない悲壮なものを感じたのでした。

つまりアメリカ人の観客たちは切実に笑いを求めて、ラスベガスへ集まってきている。ステージの上のボードビリアンが何かひとことふたこと、笑いのきつかけのようなものでも観客にむかって投げつけられ、それに飛びつくようにして笑いだす。⑩  
たいしたジョークでもなければ、それほどユニークなユーモアとも思えないワジュツであっても、問題はそこに集まっている観客たちにとって「笑い」が必要なのだという事なのです。彼らは笑うためにやってきているのですから、たとえば、一たすは一、と書いてもきつと全員、必死で笑い始めるにちがいません。

そのことを考えると、日本人は働き蜂とかワーカホリックとか言われながらも、なにか

のんびりした国民ではないかと思えます。

仕事が大変だとはいってもそれはごく一部の限られた人たちで、職場や勤務時間の中に、たくさんの隙間があり、その中で新聞を読んだり、打ちあわせと称して喫茶店に行ったり、あるいは碁とか将棋とかのクラブに属したり、俳句を作ったり、仕事が終わったあとは同僚や先輩と麻雀をしたり、あるいは打ち合わせを兼ねてゴルフをやったり。ほくらは生活の中で常にあちこちに隙間を作っては瞬間のバカンスを楽しみながら自分の精神のバランスを保ちつづけているのです。**B**、なしくずしにバカンスを使っているといってもいいでしょう。

息を詰め、脇目もふらずに全セイリヨクをかけて働く、その戦場ともいえるような激烈な働きぶりともくらべると、そこにはどこか、怠けているという言葉では言い表せない人間の知恵があるような気がするのです。

私たちはこれまで数千年の間、この湿度の多い島国でそれなりの風土に似あった生活をくり返してきました。古代のユーモア、そして江戸のジョーク、明治、大正、昭和とつづいてくる日本人のユーモア感覚は、カフソクなく私たちの生活の中に生きていると思うのです。それに対して、日本人はもつと休みをとらなければならぬ、もつとユーモアや笑いのセンスを磨かなければならないなどといった形で、上から押しつけようとするのは、どこか間違っているような気がしないでもありません。

ほくほくして、今のままでいいと言っているわけではないのです。しかし、私たち日本人には日本人に独自の生活様式とユーモアの感覚と文化の形というものがあるのです。そしてそれは風土と分かちがたく結びついているのです。

私たちは笑いの欠けた国民ではありません。《笑う》ということ、お役所が考えられるレジャーの生活指導と同じように義務と考える必要はまったくないのではないのでしょうか。**C**、今の若い人たちには、人を笑わせること、そして自分も笑うこと、そのことをアメリカ流に必死で追いついていこうという傾向が特に強みられるようになってきました。

そして、静かに微笑むこと、そして穏やかに笑うことが忘れられつつあるようです。日本には、《含み笑い》などという微妙な表現もあります。大正期には、微笑と苦笑とを合わせた《微苦笑》という新しい言葉も生まれて、たいへん流行しました。そのように《笑う》ということにおいても、ひとつの文化のパラダイムがその背後にひそんでいることを考えるとき、私たちは自分たちの笑いかたを反省するよりも、むしろそういった強迫観念にとらえられている自分を笑うような自己批評の知性を磨きあげたほうがいいのではないかと気がします。

林達夫さんは『笑い』の解説の中で、「笑いは、生の躍動―本来、人間の前進と突破と解放とにどこかでつながり、生の充溢、生のエネルギーの発散を旨とする」ものだと書いています。**注**  
ほくほくは今、マーク・トウェインの言葉を深い共感をもって思い出します。彼はこう言いました。

「私は天国へは行きたくない。なぜならば、天国にはユーモアというものがないからだ」と。  
(五木寛之『生きるヒント』)

注 広告代理店⇨広告を扱う会社 広告マン⇨広告の制作を仕事とする人 ビジネスランチ⇨仕事や打ち合わせをしながらとる昼食  
ステイタス⇨社会的地位 自由主義経済機構⇨自由な経済活動を支える社会の仕組み 鬱積した⇨つもりつもった ボードビリアン⇨喜劇俳優  
ワーカホリック⇨仕事だけが生きがいの人 パラダイム⇨時代に共通のものの見方 強迫観念⇨心から離れない不快な考え  
林達夫⇨評論家の名前 充溢⇨みちあふれること 旨とする⇨第一の目的とする マーク・トウェイン⇨アメリカの小説家の名前

問一 線部①～④のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 **A** ⇨ **C** に入る言葉の組み合わせとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ⇨ A つまり B いうなれば C また ⇨ イ ⇨ A たとえば B そのうえ C ところが ⇨

ウ ⇨ A むしろ B あるいは C そして ⇨ エ ⇨ A ですから B いわば C しかし ⇨

問三 線部①をたとえている言葉を文中から一語で抜き出しなさい。

問四 線部②「巨大な爆発物」とは何か、具体的にそれを表している語を二つ、これより後の文中から抜き出しなさい。

問五 線部③「バカンスをとらなければ生きていけない」とあるが、それはバカンスが広告マンたちにとってどのようなものであるからか、それを表す部分を文中から三十字以内で抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問六 線部④「人間の知恵」とはどのようなものか、その内容を最もよく表している一文をさがし、その最初の五字を答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問七 線部⑤について

(1) 「そういった強迫観念」とはどのようなことを表しているか、解答欄にしたがつて四十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

(2) 「自己批評の知性」とはどのようなものか、次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が他者を十分笑わせることができるかどうかを確認しようとする知性 イ 笑いにとらわれている自分の内面を冷静に観察しようとする知性  
ウ 自分自身が十分笑うことができるかどうかを検証しようとする知性 エ 笑いにとらわれている他者を客観的に分析しようとする知性

問八 (1) 線部の四字熟語を完成させなさい。ただし、○には同じ漢字が入ります。

(2) 同じように次の㊦～㊩について○に同じ漢字を入れ、それぞれ四字熟語を完成させなさい。

㊦ ○理○論 ㊧ ○材○所 ㊨ ○立○歩 ㊩ ○業○得

ウラにも問題があります。



「わしの息子がこんなことをするくらいなら、死んだ方がまだ……」  
と、言っているかのようだ。

この時から、ステンヌ少年は「一つの手が心臓の上におかれて、脈を打つのを止めるような気がしてならなかった。」

この苦しみから逃れようと、ステンヌ少年は飲み始めた。やがてまわりのものがみんなぐるぐるまわりだした。げらげら笑っている声の中で、のっぽが、フランス国民軍や、その演習のしかたをあざけているのが、少年の耳にぼんやり聞こえてきた。のっぽは、マレー街で武装集合したり、とりでで、夜に非常点呼するのをまねしてみせた。それから急に声をひそめた。士官たちが寄ってきた。まじめな顔をしている。いやしいのっぽのやつは、フランス義勇兵の急襲(すきをついて攻撃すること)を知らせているではないか。

今度こそ、ステンヌ少年は酔いもさめて、立ちあがり、怒りにふるえながら、言った。  
「にーさん、それはだめだ……。ぼくはいやだよ。」

が、のっぽは笑うだけで、続けた。話し終えるまでに、士官たちはもう立ちあがっていた。中のひとり、少年たちに戸口の方を指さして、  
「出ていけ！」  
と言った。

それから、士官たちは、ドイツ語で、早口で話し始めた。のっぽは総督(軍隊をひきいる最上の官)のようにいばって、銀貨をジャラジャラいわせながら出ていった。ステンヌは頭をたれて、あとにしたがった。ステンヌをじーっと見つめていたあのプロシア兵の前を通るとき、  
「こう言うのが聞こえた。」

「それはいいことじゃない……。いいことじゃないよ。」

ステンヌ少年の両眼からなみだがあふれた。

野原に出たとたん、ふたりは駆け出し、おおいそぎで帰っていった。ふたりのふくろは、プロシア兵がくれたジャガイモでいっぱいだった。ジャガイモのおかげで、フランス義勇兵の慥も無事に通れた。みんなは今夜の急襲の準備をしている。たくさんの部隊がひっそりやってきて、かべの後ろに集まっている。あの年をとった軍曹も、とてもうれしそうに、せつせと部下を配置している。ふたりの少年が通るのを見つけて、軍曹は優しい笑顔を見せた。

ああ、このほほえみは、小さなステンヌの胸をどんなにいためたことか！「少年は、  
「プロシア兵の方へは行かないでください！……ぼくたち、あなたがたを裏切ったのです。」  
と、叫びたくなった。

「もし、おまえがしゃべったら、おれたち銃殺ものだけ。」

「と言っていたので、おそろしくて何もできなかった……。」

クルヌーフ(パリ北部郊外の地方)で、ふたりは荒れた空き家に入り、お金を分けた。本当のことを言うと、お金は非常に公平に分けられた。うわっばりの下ですばらしい銀貨がジャラジャラなるのを聞き、いよいよあの広場でガロシーユができるのだと思うと、ステンヌ少年は、それほどおそろしい罪をおかしたとも思わなくなった。

ところが、ひとりになると、どうしようもなかった。城門(市内に入る門)のあたりを通り、のっぽと別れたとたん、ポケットがとてつも重く感じられ、さつきから心臓をしめつけていた手が、今までにならないほどの力でしめつけてくるような気がしたのだ。パリは、もう、前と同じパリには思えなかった。通りすがりの人たちまでが、少年がどこで何をしてきたのか知っていて、厳しいまなざしで見ているかのようだ。「スパイ」という言葉が、通りのざわめきや、運河にそって練習している鼓手隊(太鼓を打つ役割の部隊)の大鼓の音から、聞こえてくるような気がする。

少年がやつとの思いで家にたどりつくと、父親がまだ帰っていなかった。心底ほつとした。そこで、大急ぎで、自分の部屋にさがっていくと、重苦しい思いをさせていた銀貨を、枕

の下に隠した。

その晩、ステンヌじいさんは、今までになく元氣よく、ほがらかに帰ってきた。たつた今、地方からニュースがはいつて、国の情勢がいい方に向かっているという。夕飯の間じゅう、むかし軍人だったじいさんは、かべにかけてある銃をながめ、優しく笑いながら、息子に何回も言った。

「なあ、おまえが大きかったら、プロシア兵どもを一発やりにいけるのになあ。」  
八時ごろ、大砲の音が聞こえた。

「オベリリエだ……ブルジェでたたかっているんだ。」

と、老人は言った。とりでのある場所はみんな知っているのだ。ステンヌ少年は背くなり、すぐ疲れているからといって、寝にいった。けれども、眠れない。大砲の音が絶えず聞こえてくる。プロシア兵を急襲しようと、闇にまぎれてやってきたフランスの義勇軍が、逆に伏兵(隠れて待ち伏せする兵士)にやられる光景が目につく。笑いかけてくれたあの年をとった軍曹が、雪の中に、たくさんの兵士たちといっしょに横たわっている姿が少年の目に見えるようになった。

こうした人たちが流した血とひきかえに、この枕の下にたくさんのお金が隠されている。そしてそれをやったのは、ステンヌ氏の息子、軍人の息子の僕ではないか！少年はなみだで息がつまりそうだった。

となりの部屋で、父親が歩いたり、窓を開けたりしている音が聞こえる。下の広場では集合ラッパが鳴って、遊動隊(作戦上自由に活動する部隊)の一大隊が、出撃のために点呼をとっている。たしかに、決戦なのだ。かわいそうな少年は、すすり泣きをこらえることができなかった。

「どうしたんだ、いったい？……。」

ステンヌじいさんは部屋に入ってくるなり聞いた。  
少年はもうこらえきれず、ベットから飛び降り、父親の足もとに身を投げ出した。そのはずみに、銀貨がころころと床に転がった。

「なんだこれは？ お前盗んだのか？」

老人は身を震わせて聞いた。

そこでステンヌ少年は、プロシア兵のところに行ったことや、何をしたのかを、一気に話した。話していくにつれて、心臓がずつと楽になるような気がした。すっかりしゃべってしまつと、肩の重荷が降りたようだった。

ステンヌじいさんは、おそろしい顔つきで聞いていたが、聞き終えると、手で顔をおおって泣きだした。

「とうさん……とうさん。」

少年は、何か言おうとした。

じいさんは、こたえないで、息子をおしやり、お金をかき集めた。

「これで全部か？」

じいさんは聞いた。

ステンヌ少年はうなずいた。《じいさんは、銃と弾入れをかべからはずし、ポケットにお金をつつこんだ。》

「よしっ！」

じいさんは言った。

「金をやつらに返してくる！」

それ以上、何もいわず、ふりかえりもしないで階段を降り、闇にまぎれて出陣していくフランス義勇軍に加わった。その夜以来、じいさんの姿をふたたび見かけることはなかった。

(アルフォンス・ドーデ 南本史訳「少年スパイ」)

問一 線部①「憤慨して」について、ステンヌ少年が「のっぽ」の誘いに「憤慨し」たのはなぜか、解答欄にしたがつて、三十五字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問二 線部②「おそろしい三日間」について、この時ステンヌ少年はどのようなことに対して「おそろしい」と感じていたのか、解答欄にしたがつて答えなさい。

問三 線部③「のっぽはあわれっぽい声で言った。」について、「のっぽ」がこのような行動をとったのはなぜか、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人の良さそうな番兵の同情を買おうとしている。
- イ 人の良さそうな番兵に敬意を表そうとしている。
- ウ 人の良さそうな番兵に服従しようとしている。
- エ 人の良さそうな番兵をからかおうとしている。
- オ 人の良さそうな番兵に助けを求めようとしている。

問四 線部④「はずかしさ」について、この時ステンヌ少年はどのようなことに対して「はずかしさ」を感じていたのか、解答欄にしたがつて答えなさい。

問五 線部⑤「まなざしには、優しさ」と非難がまじりあっていた。について、プロシア兵の「優しさ」「非難」とはそれぞれどのような気持ちか、解答欄にしたがつて答えなさい。

問六 線部⑥「一つの手」とは何をたとえているか、考えて一語で答えなさい。

問七 線部⑦「士官たちは話し始めた」とあるが、「士官たち」は何について「話し始めた」と考えられるか、答えなさい。

問八 に入る語句として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア あわてた様子で
- イ 冷やかに
- ウ 強い口調で
- エ かなしげな声で
- オ 心細げに

問九 線部⑧「少年はなみだで息がつまりそうだった。」について、その時のステンヌ少年の気持ちはどのようなものか、八十字以内で書きなさい。(記号・句読点も一字とする)

問十 へ のステンヌじいさんの言動からは、じいさんのどのような心情がうかがえるか、解答欄にしたがつて五十字以内で書きなさい。(記号・句読点も一字とする)

ウラにも問題があります。

三 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

水と水

雨水、海水、湧水、  
 小水、洪水、水蒸気、  
 地球の水はかれこれ三十億年間  
 ひっきりなしに循環してきたという。

けさ、蛇口をひねって、薬缶でわかし、  
 煎茶にして飲んだ一杯のなかには、  
 (注) ギゼーの大ビラミッドの天辺に  
 ふったことのある分子、恐竜の  
 血管をめぐりめぐった経験をもつ  
 分子が含まれていたかもしれない――  
 ① どんなロマンに満ちた話でも、  
 水の時間軸は、ゆるしてくれる。

だが、トイレの排水ハンドルをひねり、  
 時計まわりのウズが便器のなかでおこって、  
 水がふたたび旅立つ際の、その行き先には、  
 ② あまりロマンをかき立てられるものではない。  
 フランスの(注) ヴィクトル・ユゴーはいった。  
 「下水道は厳しい相手だ。すべてをありのままに語る」

きょうの東京湾は波がおだやかで、きらめく海面に  
 綿雲が影を落としている。④ 多くの汚れをも  
 のみこんで、ひっそりと向き合い、  
 つつみかくしのない水と水との語らい。

(『ゴミの日』アーサー・ビナード)

注 ギゼー＝エジプトの地名 ヴィクトル・ユゴー＝小説家の名前

- 問一 ― 線部①はどのようなことを表しているか、次の中から、最も適当なものを選び、記号で答えなさい。  
 ア 長い時間の流れの中で地球を循環してきた水は、あらゆる想像を可能としてくれる。  
 イ 長い時間の流れの中で常に姿を変えてきた水は、人々が作り上げた文明の中にも生かされている。  
 ウ 長い時間の流れの中でいつも清らかさを保ってきた水は、人々が犯した罪を責めはしない。  
 エ 長い時間の流れの中でたえず時間と共に移り変わってきた水は、今もなお世界全体を潤している。
- 問二 ― 線部②とあるが、なぜ「ふたたび」なのか、解答欄にしたがって二十字以内で答えなさい。
- 問三 ― 線部③「すべて」とあるが、「すべて」とは何の「すべて」か、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。  
 ア 水を流した人々の将来      イ 水を汚した人々の責任      ウ 水を軽んじた人々の思考      エ 水を使った人々の生活
- 問四 ― 線部④について、

(1) 「のみこんで」の主語は何か、詩の中の言葉を抜き出して、答えなさい。

(2) 「水と水との語らい」とは、何のどのような様子をたとえているのか、解答欄にしたがって四十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

